

《ニッポン画K松翁図屏風》1999（平成11）年



# ニッポン画家・山本太郎

百兵衛インタビュー

熊本、京都、秋田。

20周年を迎えたニッポン画を生んだ

日本の多彩な伝統と文化



山本太郎は、日本画家ならぬニッポン画家である。日本画材を用いて現代を描くニッポン画。日本画の新しい形のようにも、現代美術のいちジャンルのようにも見えるが、山本はこれを次のように規定している。

一、現在の日本の状況を端的に表現する絵画ナリ  
 一、ニッポン独自の笑いである「諧謔」も持った絵画ナリ  
 一、ニッポンに昔から伝わる絵画技法によって描く絵画ナリ

2019年初春、京都のイムラアトギャラリーで個展「太郎冠者と太郎画家 茂山千之丞襲名披露記念—装束披露—」が開催された。かねてより交流のある大蔵流狂言師・茂山童司氏の三世茂山千之丞の襲名披露演目「花子」を記念して、山本が制作し、茂山氏が舞台で着用する装束と図案約10点を披露する展覧会だ。会場に山本を訪ね、ニッポン画が生まれた経緯やその進化、ふるさと熊本に対する思いなどを聞いた。

——山本さんは、生まれてから高校まで熊本市内に住んでいたのですか？

**山本** 基本的にはそうですが、父の仕事の関係で、4歳から6歳までの2年間をアメリカのサン・ディエゴ、10歳から11歳、小学校4年生の途中から5年生の途中までの丸1年間でスウェーデンのストックホルムで過ごしました。——その経験が、日本を外から見る視点につながったのでしょうか？

**山本** 自覚はありません。幼い頃は、熊本での生活も、海外での生活も、普通の暮らしだと感じていました。

——子ども時代はマンガが好きだったそうですね。マンガ以外の絵も好きでしたか？

**山本** 小学校、中学校まではマンガを読むことがメインだったかな。マンガに関しては、スウェーデンにいたことが少し関係するかもしれません。僕らの世代は、少年ジャンプを筆頭にマンガ文化の黄金期。雑誌の発行部数も一番多い時期でした。その頃、日本のマ